五十年前のフランス留学（5・1・16）

加藤美雄（昭10・文丙）

私、昭和十年、今から五十何年か前、漸く三高をアップアップして卒業致しまして、それから今迄やっと生きてきた、生き残りの一人として、話をさせて頂きたいと思います。

話の主題は五十年前のフランス留学の想い出ということでございまして、フランス留学を致しましたのが、丁度昭和十四年の暮でしたから、向こうへ着きましたのが昭和十五年一月末頃でした。そして昭和十六年四月の終り頃迄一年と二カ月位おったわけです。何故そんな半端な年月で追い帰されてきたかということは、又後で申し上げると致しまして、その経験が私のフランスの最初の想い出と言うことです。色々なことがございましたけれども、実は、既に本にして書いておりまして、ここに持ってまいりました……「私のフランス物語」の宣伝みたいになりますのでどうかと思いますが……これが去年十一月に出来たばかりでございます。この中にあることがわたしの今回の話の大部分でございます。これを補う別なことは、ちょっとした付け足しであると

いうふうに思って頂けたらいいと思います。

さて、フランス留学のことについては、一度三高の皆さんの前でお話した事がございます。今から五十二年前、昭和十六年でした。丁度私が留学から帰って何カ月だったかよく覚えてないのですが、六月か七月頃。五月に帰って、その翌月かその翌々月に、伊吹先生——皆さんご存じの有名なフランス語の先生です——伊吹先生が、「加藤、ちょっとこい」ということで、怒られるのかと思っていましたら、「話をせえ」といわれ、「何の話ですか」「そりゃあ決まっているやないか、お前は行ってきたんだから、しかも戦争中に行って来たんだから。この間の新聞に載っていたぞ」とこういうわけなんです。当時京都には「京都日日新聞」というのがありましたが、今日でもございますはずですが……当時その新聞記者に類する仕事をなさっていた方が、実はこの三高の神陵文庫にも文章を書いておられます和田洋一先生——先生は残念ながら、二・三カ月前に亡くなられましたが——というドイツ文学の専門家でした。その和田洋一先生が、当時は新聞記者として、私の家に見えまして「君、ちょっと、フランス体験記を三枚か四枚でいいから書いて下さい」というわけで、書きましたのが当時の新聞に載りました。大戦後日本の敗戦もありましたが、フランスの敗戦の方が先輩であったわけです。それを先ず書けというわけで書かされたことがございます。

大戦初期フランスがドイツ軍に攻めこまれましたのはドイツ軍の戦車隊ですが、オートバイ隊

も加っていたのです。空軍の爆撃はありましたが、前線の攻撃には使われなかったようです。ただ、機銃掃射ということがありました。こうしてフランスが敗戦に追いこまれて行ったその様子を、伊吹先生のお申出でお話したことがございました。三高の新徳館ですか、校門を入って左側のあの一階建桧皮葺(ひはだぶ)きの会館で、話をしたことを憶えております。伊吹先生が、こういう所に座っておられて、何を話すのかと、関心を持たれたご様子でじっと聞いておられた事を思い出します。しかしその時の話の内容はよく憶えておりません。憶えておりませんが、微かに今想い出すのは、当時、フランスに居った時の新聞記事とか、一般のフランス人のうわさ話などを報告したと思います。ドイツ軍の攻撃にフランス軍が一度敗けました。それでペタン元師という人が出てきまして、フランスを救うという意味で、フランス救援政府を作った訳です。さらにド・ゴール将軍がしばらく後に出てきまして、それが自由フランスと言うのを作って、イギリスで亡命政権を作りました。

当時のフランスの政府は、ヴィッシー政府といいまして、それと自由フランスとが対立した時代がしばらくあっただろうと思うんです。そういうことで、そのヴィッシー政府の指導者というのがペタン元師、これは第一次大戦の勇者でもありましたので、皆さんその名前をご存じと思いますが、ペタンというのは、非常に有名な将軍、政治家としてフランスとドイツの協調を目指して、ともかく敗戦処理のためのフランスの指導者になったのです。そのペタンが政府を、指導し

ておりました間は、フランスは二つに別れておったわけです。一方はパリを中心とするドイツの占領地帯と、もう一つはヴィッシー――すなわちリヨンのちょっと西北の町――そのヴィッシーを中心として独立を保っていたフランスの地域とに別れて暫く平行していたわけです。ところが、一九四四年にアメリカ及び英仏の連合軍がノルマンディー海岸に上陸するということになって、同時にドイツは、フランス内部のフランス軍隊、その他民衆からなるレジスタンス部隊、さらにアメリカ軍及びその連合軍に煽られて、ドイツ本国の方に早々に逃げ去って行く。最後はソヴィエットの攻撃を背面からうけてベルリンに追い詰められて、遂にヒットラーが一九四五年五月に自殺するということになりました。

日本のことはここでは申しません。皆さん第二次大戦にご苦労なさった方も多いと思います。わたしは戦前のこの期間にしばらくフランスにおったものですから「お前、いいことをしとったなあ！」と、さっきも旧友からひやかされておったわけですが、幸運であったといえば甚だ申し訳なく幸運であったわけです。

そんなふうに、やっと現代迄生き伸びてきたのですが、留学に参りました当時の事情を少し掘りさげて申し上げましょう。

フランス政府留学生制度というのは、今でも存在しています。今でも一年に何人位でしょうか、フランス政府は色んな専門に分けて三十人位は留学生として合格させているんじゃないでしょう

か?。あるいはもう少し多い場合もあるかと思います。私の行きました時は、非常な端境期でございまして、その私の年度を最後として、この留学制度が一時中断されるという最後の年度(一九三九年度)でしたから、人数も少なくて、僅か五人しかおらなかったのです。五人の中にフランス文学やりますのが三人おりまして、その他は原子物理学、実験の方でしたけども、後に有名になられた湯浅年子さんという方がおられ、物理学の方では優れた学者だったそうですが、残念ながら一九八〇年に亡くなられました。その他数学者で大阪大学を出てから大阪市立大学で教えられました井上正雄氏、この方はまだ現存で、元気におられます。実はこの間もお会いしたんですけども、今でも東京で教べんを取っておられます。そんなわけで、われわれの仲間は僅か五名でしたが、戦争中にフランスでどういうふうな行動を取ったか、どんな悲喜交々の運命をたどったかということを本に書いたわけです。それをいちいち詳しく申し上げるのは、話しが非常にややこしくなるので、最初の頃の具体的な挿話から話して行くことにいたします。私の時代にはヨーロッパへの旅はまだ船旅でした。客船に乗るわけです。フランスにも客船の会社がありまして、フランス政府の命令で、M・Mメッサジュリー・マリティームという会社の汽船ジャン・ラボルド号に乗ることになりました。出発は神戸港からでした。一九三九年十二月二十二日に船に乗り込んで、二十三日の朝午前六時頃に、暗闇に乗じて出港するという、はじめから隠密行動の船旅でした。

何故そうなったか?、勿論戦争が既に始まっていました。一九三九年九月三日ドイツがフランスやイギリスに対して宣戦布告をします。その布告のニュースの張り紙を日本にいる時に見たのです。見た所は丁度四条河原町の角っこの電柱か、壁のところに号外のようなもの、――プリントか活字だったか忘れました――多分活字だったと思いますが、それが張り出されて、その貼り紙の前を通ったのは、私が送別会をやってもらって会場を出て来たときで、その目の前に、大きく「ドイツが、フランス、イギリスに宣戦布告」をしたと書かれていたのです。その九月三日、(一九三九年)の夜の光景がありありと想い出されます。私の目の前は一時真暗になってしまいました。初めから暗闇の隠密。そういう運命が私の前にあったわけなんで、戦争が始まったからには、もうダメだと言うことになり、暫く待っていますと、フランスの大使館から通知がきました。「暫く待て」というのは、当然でしたが、待ったらどうなるかと思って、ダメなのかと…思って待っておりました。ヨーロッパでは戦争が始まっているわけです。ドイツ軍がポーランドに侵入して十日程でポーランドを席巻してしまう。更に次は南のルーマニア辺りに進攻し、さらには北に転じてノールウェーの出口を封鎖して、北海の制海権を握ってしまう。そこに石油の基地があって、そういうものを奪いとるという、まあそういう行動があったわけでした。これはヨーロッパの戦争だから、われわれのフランス留学なんかとてもダメだろうと、思っておりますと十二月の初め頃だと思いますが、フランス政府は「皆さんの」ということは、われわれ留学生の

ことですが、「生命は保証しない」しかし費用は出す。「費用は出すから行きたければ行って下さい」と、こういうことなんですね。そのときどちらに決定すべきか迷いました。私は若かったので、最初から行くことに決めておりましたけれども、家の者は困りました。母親なんかは強く反対していたようでした。ところが、父親が「行け」という決定を下したのです。その当時、父親というのは権威を持っていましたから。行く事になって、その船が神戸に着いたのが、十二月二十二日でした。乗り込んではみたものの出発時間は不明。見送りの人はその日（十二月二十二日）の午後十時になったら船から出て行ってくれと言うことで、出発の日が決まったわけです。そして勿論、われわれにとって行く先はフランスに違いないんですけれども、一般の人には分からないようにしまして、特に敵国であるドイツ、ドイツは昔から潜水艇、ユーボートを沢山持っておりましたから、そういう物が出没する海の情報を与えないために、フランス船のコースを、はっきり明示しないということになったわけです。

とうとう暗闇の二十三日午前六時半に出発しまして、われわれの船は何処へ行ったか、瀬戸内海の島々の間を通っていたようです。その日の夕方頃には、恐らく下関辺りを通って、東シナ海に出て行ったと思いますが、それから一日半か二日位である港に着きました。秦皇島（しんこうとう）という港でした。その港に船は何のために行ったのか？北京から丁度七・八十キロ離れた港のようですけれど、やはり兵隊を積みこみに行ったのです。中国に在留していたフランス兵を引き揚げて、何処

かへ連れて行くと言うことらしいのです。これは後で分かったのです。十二月の終りですから非常に寒くてそこへ着いた時は勿論冬の真っ最中で、氷が張りつめんばかりの港で、ぶるぶる震えながら上陸したのです。わたしは中国の金銭をもたなかったものですから港付近をぶらついただけで船に帰りました。その次が上海です。上海は、当時も相当大きな町で、日本の海軍が設営した租界というのがありました。

日本租界、イギリス租界、フランス租界なんかがあって、そこに二日間停泊いたしました。それから香港。香港へ行きますと、丁度春の季候でして、桜が咲きそうな陽気でした。ビクトリア・ピークという――ご存じの方も多いと思うのですが――小高い丘の上に、綺麗なイギリス人の別荘が沢山並んでいました。香港の下町は昨日もテレビに写っておりましたが、あのような沢山の建物はなくて、しょうしゃなビルが十数棟建っているという、非常に淋しいが綺麗な港でありました。その港に降りてケーブルカーでヴィクトリアピークに登ったという思い出がございます。その後二～三日するとサイゴンでした。今はホーチミン市といいますが、人口はどれ位なのでしょうかね？当時はプチ・パリ（小パリの意）とよばれる程しょうしゃな街で、メインストリートを行きますと、ホテル・コンティナンタルというのがありまして、ちょっとフランスのシャンゼリゼを想わせるような綺麗な街が続いているのです。勿論当時は戦争の影響といえばフランスのインドシナ戦争が、まだ始まっておらなかったようですから、非常にフランス的な植民地と

して栄えておりました。それからシンガポール。方々の港を船で行くのですから楽しい旅でした。……最後のマルセイユに着くまで三十七日。三十七日間、当時としてもそんなに長い日数ではないのです。大体船が早く走っても三十二〜三日はかかるといわれていた頃ですから、当時としては上々といえる航海でした。

例えば大きな海の真中で船に出会いますと大抵の場合は、私が乗ったフランス船——名前はジャン・ラボルド号という船で、一万二千トンでした。その船で航海していると大抵のほかの船を追い越して行くというスマートな船でした。ジャン・ラボルド Jean Laborde という名前。これはフランス人の冒険家の名前でして、彼はマダガスカル島におって、一時はそこで奴隷として売られたけれども実業に成功して当時の王朝に非常に可愛がられ、その王朝が滅びてからは、遂に姿を消してしまったというマダガスカル開拓時代の英雄です。そのジャン・ラボルドという人の名をとった名前の船でございました。

マルセイユに着きますと、ここは勿論フランス領なんですけど、日本人が非常に活躍している。名前をご存じかも知れませんが、薩摩次郎八という、当時の実業家ですが、フランス政府に非常に関係が深い人でして、フランスの文化に対する貢献度が高いのです。この人は日本人がパリに住んで勉強しやすいようにパリの大学都市の日本会館というのを建てる時に寄附をして日本人学生の便宜を計るようにしてくれたのです。このような有数の実業家が、フランスとかアメリカと

か、そういう所で文化的施設として物を寄附するのは非常に少ないんですが、その当時から薩摩次郎八という人は、大のフランスびいきでして、あらゆる所で、フランスに渡って来る日本人の世話をするのです。次にパリにできていた学生会館を含む大学都市。——これは話をすると切りがありませんが、——大学都市というのは、大学に行く学生のための多くの宿舎のある団地と思えばよいのです。宿舎といってもちょっとしたホテル並なんです。京都にはそんな広い土地がありません。円山公園と岡崎公園を集めて倍にしたような地域ですね。そこへ世界各国から集まる学生のために多くの会館ができているのです。「日本会館」はその一つです。それの建築資金を寄附したのが薩摩次郎八と言う人です。こういう人は日本人ではなかなか出てこないんで、今ここでくり返して名前を紹介しておきます。そういう点で、日本とフランスの文化の掛橋になった最初の実業家であったと思います。

さて、話をパリに移しますと、パリは当時はドイツの攻撃を受けていました。勿論地上戦は始まっておりませんけれども、当時、パリに対して空襲をやるぞやるぞという勢いを見せながら、実は最後迄実行されなかったんです。しかし空襲警報は殆んど毎日のように発せられる。空襲警報が出て、爆弾を何拠へ落としたかと言いますと、パリの周辺です。パリの周辺に工場があるわけです。ルノーとか、シトローエンとか、当時は自動車の製造ですけども、飛行機も作っていたようでした。そういう工場に弾を落とす、弾を落とすためにパリの上空を飛ぶわけですね。落と

すのかなと思ってひやひやするんですけども、パリの真中には遂に落とされなかったという事が現実でした。

そんな訳で、われわれのパリの生活が始まりました。ここでパリの学生生活の話をちょっと致しますと、当時は日本人の学生は非常に少なくて、私の知る限りでは、学生は数十人位しかおりませんでした。それからパリ在住の日本人は約二百人位。家業家、商社の人、大使館の人とかです。現在は何人程パリに日本人がいるのか知りませんが、二万人は越してるだろうと思います。当時のパリには、二百人。何故かといえば、当然それは戦争中だからです。そしてどんな制限があったかどんな苦労があったかと申しますと、実は非常にのんびりしておりまして、地上戦が始まるまでは、パリは非常に惰眠をむさぼっていたといっていいんじゃないかと思います。現にドイツ軍がパリに入ってきたのが六月十日過ぎでした。われわれがフランスに着きましたのが一月三十日。二月一日にパリに着きまして、それから二、三、四と三カ月ばかり悠々とパリで生活が出来たわけです。何故パリの生活が悠々と出来たのか、それは勿論当時はドイツにはヒットラーという男がおりまして、その男が一体どういう事を狙っていたかということは、ご存じの通りですから、詳しくは申しませんが、フランスの攻撃は後に廻わされました。フランスは敵としては一番付き合いにくいというんでしょうか?。勿論最後の敵はドイツにとってはイギリスなんですね。イギリスを崩壊させれば西ヨーロッパを征服出来ると、こう思っていたんじゃないでしょう

か?その前にフランスをという事だったんですが、それ迄にはポーランド、ノールウェーからずうっとデンマーク辺りの方も含めて攻略してきた。そしてイギリスとの戦いに手古擢っているうちに、ロシヤ(当時のソヴィエト連邦)に侵入することになり、ついにスターリン・グラードの戦いがあって、ドイツ軍は相当やっつけられたわけです。最初の内は手近な東欧の諸国と、次に北欧のノールウェー、スエーデン辺りだったのです。特にノールウェーは石油の基地として多くの物資を運び出すのに役立つ。そんな意味でノールウェイに関係する北の海の制海権というものを争って、手間取りました。その間、三カ月にわたって我々はパリ生活を楽しむことができました。勿論わたしたちのパリ生活は風前の灯のようなものだったんですけれど、現実には平和を楽しんだといえるようなことになったのでした。

当時のフランスにおける日本的な行事としては、紀元二千六百年祭がありました。これは紀元節がある以上あったのです。昭和十五年、私がフランスに行きました年が、丁度紀元二千六百年目で、日本ではオリンピックをやる計画があり、すでに国際的に決定していた時でありましたが、ヨーロッパの戦争のために中止になってしまいました。一方で日本の紀元二千六百年祭は当時の紀元節の日、二月十一日に大使館官邸でやるということになりまして、我々はそこへ集まったわけです。

フランス料理といいますと、何しろ油臭い料理ばっかりを、食べさせられるとはかぎりません。

フランス料理は美味しいっていいますけど、我々学生が食べる物はそれ程美味しくありません。それでも基本的なパンとチーズは当時パリのどこで食べての美味でした。それでも時々は日本食も食べたいのです。勿論日本食のレストランはありました。その頃パリに三軒あったんですけれども、お酒が一本十六フランでした。十六フランというと、当時の物価でどの位の価値か？日本の五・六倍に感じたと記憶します。とにかく黄金の水とかいって非常に貴重だったんです。紀元二千六百年祭には、大使館官邸でレセプションというものが盛大に行われました。それで我々若い者、中年の日本人も集めて当時としては盛大なパーティが行われました。現在の立食パーティなんかよりはるかに豊富な材料を当時の日本政府は持っておりまして、まだ日本は元気だぞというところを見せてくれたような思いがございました。お酒をそれ相当に飲まされたということです。

それからもう一つの思い出は、私の仲間の一人でした湯浅年子さんという、私よりちょっと年上でしたけど、なかなかの才媛でして、この女性が才媛であると同時に気持の優しい女性でした。学問を鼻にかけるようなことは絶対にしないし、どうして学問がそんなによく出来るのか、そんなことを曖気(おくび)にも出さないような女性でした。この女性が丁度当時のピエールとマダム・キュリーが設立したラジュウム研究所、それを継いだキュリー夫妻の娘のイレーヌがジョリオ（＝キュリー）という人と結婚しましたが、その主人の方が二代目の研究所長になっていたわけです。こ

のジョリオ＝キュリーさんが主宰していたラジュウム研究所に、わが湯浅年子さんが所員として入るという、それはえらいことになったのです。われわれとしては、晴天のへきれきというか、トンビの中に鶴一匹という思いでまさに彼女の見事な足跡と行動を見守ることになりました。そういう意味で、放射能、殊にラジュウムという放射線元素を研究する所なのです。ラジュウムの発見は、お母さんの方のマダム・キュリーによるものですが、その後の研究内容によっては色んな兵器にもつながるかもしれない物質の、そういう研究を実際戦争中にやっているところなんです。その所員になった彼女がわれわれの中の一員として加わっていたのです。

次に、文学研究の連中にとっては、ソンボンスにある文学部が中心でした。戦争中、私は文学部の多くの教室に通ったのでした。リシュリユウ講堂という大きな教室がありました。リシュリユウとは十七世紀のフランスの宰相の名であります。リシュリユウ講堂には教壇の後に大きなピュヴィ・ド・シャヴァンヌ（一八二四―一八九八）という画家の大壁画があるんです。この画家は日本では単にシャヴァンヌと略称で呼ばれることがあります。これは、ちょっと昔から象徴的といわれる画でして、古代ローマ時代の風俗を描いた「聖なる森」という絵画で、男女の裸体の姿を描いた一種の風俗画なんです。シャヴァンヌといえば第一流の画家ですから、それが画いたでかい、高さ五メートル以上もある大壁画です。そういう壁画をうしろにして先生方が講議をするわけです。これだけでもソルボンヌの名物という壁画です。ソルボンヌ大学といいましても、

当時はカルティエ・ラタン界隈のど真中にあるソルボンヌ学舎一棟だけをいっていたわけですが、最近ではパリ大学と称して、分散して十三分校余りが出来て、パリ市の内外にバラまかれています。第一パリ大学、第二パリ大学等と称して第十三パリ大学まであるのです。これは有名な学生運動（一種の革命）、一九六八年の学生運動の結果として時間をかけてできたものです。日本でもわれわれ大学に関係する者は、非常にこの種の学生運動によって苦労したわけですが、その年代、その時代の学生運動の発端がフランスはパリのソルボンヌで始まったという厳然たる事実があるわけです。つまり、ソルボンヌは全ての学生運動（革命）の根源であったというわけです。そんなことから、当時の学生は怠惰でもあり、又勉強家でもあるという、そういう不思議なフランス人の両面を持った人種でした。その学生運動の後で学生と先生方、教授方との話し合いを継続して、民主的に、どの面からでも学生が先生と接触出来るという、そういうふうな意味で、多くの教授や助教授を増員したわけです。日本でもこれに追随して大学と大学教授を改革しようとしたのでした。

当時パリの学生であったわれわれに一番刺激を与えたのは、やはり芝居とか、寄席（よせ）とかいうものでした。日本では最近は非常に寄席芸人というのが人気を博しておりますが、フランスもやはり寄席が非常に盛んな国なんです。特にシャンソンというのは、勿論フランス以外、パリ以外にはないのですが、だからそれを歌って踊るという、それがフランスの寄席の一枚看板的なスペク

タークルであったわけですね。ジョセフィーヌ・ベーカーなんていう女性がおりました。ベーカー Baker（Joséphine）はフランス語ではバケールと呼んでいます。わたしたちはバケールとはどんな芸人かと、しきりに興味をもっていたのです。ジョセフィーヌというのですから女ですね。バケール、これはご存じのように最近（十年程前）に亡くなったんですけど、彼女は死ぬ前の数十年間、世界の多くの孤児を養い育てたことが評判になりました。私が最初にフランスに行きました今から五十年前には、若くて、はつらつとした半ば黒い混血の女性でして、彼女が舞台の上で踊り、そして歌う、このシャンソンが実に素晴しい。現在はレコードやCDにも入っております。ジョセフィーヌ・ベーカー、フランス語でバケールと言うのがパリのシャンソンと踊りの革新をもたらした偉大な芸人でした。男の方では、この人ももう死にましたがモーリス・シュヴァリエ Maurice Chevalier. シュヴァリエというのはシャポー・ド・パイユといって、麦わら帽子を被って踊りながら舞台の上で歌う、最近でいえばチャップリンにやや似た芸人、歌手でした。バケールとシュヴァリエ、この二人の共演が現実のものになったのですからそれじゃ行こうということになりまして、留学生仲間が揃って行ったわけです。ガジノ・ド・パリという大きな劇場なんです。このバケールというのがどうして有名になったのか、シャンソンも上手いんですけど、演出家が非常に巧みなサーチライトを使って踊る彼女を透して、後の壁にその影像を映し出すという当時としては新しい手法を用いたのです。現代ではあまりやらなくなった投影式手法でした。

そして一躍この興行が有名になりました。二人のシャンソンの方は軽妙な歌というか、シャレたというか、シックというんですか、そんなふうな感じで非常に好感が持てる、そういうものが聞かれたというのはパリが平和であったという証拠だと思いました。

そのほかフランスは、劇の盛んな処でございます。芝居といいましても、現代劇、古典劇がありますが、何といっても古典劇というものが、モリエールにしても、ラシーヌにしても、そういう古典劇が現代でも当然のように絶えずどこかの劇場で上演されているのです。われわれはフランスの芝居を観に行ったのかといってもいいほど芝居を観ました。芝居というものが、それは単に筋書を観るとか何か役者の芸を観るというよりも、むしろ、フランス語がいかに巧みなエロキューションで発音されているか、また役者の台詞になっているか、日本でいえば一種の顔見世の歌舞伎の科白(せりふ)回しのようなものに魅せられるのです。だからフランス古典劇は歌舞伎だと想えばいいと思うんです。歌舞伎を見に行く(但し科白の言語は二十世紀と十七世紀の古典とほぼ同じなんです)これがフランス古典劇の観劇法なんです。ただし日本の歌舞伎のように誇張された科白回しではありません。非常にリアリステックに役者は喋るんですけど、そこにフランス語特有の抑揚を個性的に生かすのです。その特有の科白回しで役者の味を出すということが多くの古典劇の上演では見られるのです。

次にはオペラがあります。これは歌詞を歌うわけですから名曲と個性のある歌い手で観客を魅

了するものです。これらを殆んど毎日のようにやっていまして、それがしかも安くて観られるのです。安いということは、学生が行きますと大体五割引なんです。五割よりもっと安いような席もあるんです。決して立見席ではありません。相当な席に坐れるのです。また二階、三階の隅っこはそこへ行きますとさらに安い席があるのです。天井桟敷というわけです。上から見物するとよく役者の声が聞こえ、また舞台を目の前で見るように思える。そういう芝居の座席があるのです。上の方迄声がよく聞こえるものですから、そういう点でオペラは勿論ラシーヌや、モリエールや、コルネイユというような有名な古典作家、イギリスでいえばシェークスピアのようなものですね、それを見ようとさえ思えば、毎日のように見られました。

それから私はパリを去ってボルドーへ行きました。ボルドーと言えば…この地図を見て下さい。これがパリですね。この辺がボルドーです。この間が六百粁、丁度大阪・東京間位です。この六百粁という間を当時列車でいくらかかったかをいいますと、九時間半。五十年前ですよ、現在はTGVという特急があります。特急は確か非常に速くなって四時間以下、三時間半位です。

当時は九時間半で、しかも戦争中ですね。パリの駅からボルドー迄一人で行った事をよく憶えております。そしてボルドーに半年間を過ごすことになったのです。これを話せば長くなってしまいます。しかし、このボルドー行きはわたしとしては、非常に恵まれたチャンスであったのです。丁度京都にある関西日仏学館の元館長のマルシャン先生という人が、しかもご夫婦でボルド

ーに住んでおられたのです。
先生たちは私が行くよりちょうど半年位前に日本からフランスに帰って、しかもボルドーに住んでおられました。京都の日仏学館で習った先生方で、ムッシュにもマダムにもフランス語を習いました。「ムッシュ・カト、くるならいつでもきて下さい」といってくれていたわけです。そういうわけで、ボルドーに着きますと、早速ご夫婦に頼んで下宿を探してもらおうと思っていたのでした。

さてパリでは先程もいいましたように大学都市に住んでおりましたが、大学都市の中の一つの会館、フランス地方会館という会館にいたのです。大学都市は広い敷地の中に五十カ国程の国の会館があるのですが、その一つの会館なんです。大へん設備の行き届いたところでした。ところがボルドーへ行きますと、そのような会館はありません、先程申しましたように京都で教えをうけた元日仏学館の館長さんに頼んで下宿を探してもらうことにしました。勿論伝手がなければフランスでは下宿はなかなか探せないものです。フランス人の家にひょっこり入って部屋を貸してくれませんかというわけに行きません。やっぱりフランス人というのは、われわれ東洋人を嫌うわけではありませんが、一旦親しくなるまでは、何拠の国の人もそうでしょうけどよい関係というのは非常にむずかしいのです。その伝手を求めることが私の場合マルシャン氏ご夫妻のお陰で、割合スムースに行ったということです。そうして下宿が決ったのです。そこはフランスの中流の

家庭で、夫婦と子供が二人、そのほか老人が一人いるという家庭でした。
建物は三階で部屋がかなりありまして、そういう所に下宿を見出すことになりました。その下宿の形式はパンション形式（英語でペンションといっていますが）。そこでは家の人と一緒に食事をして、部屋代、食事代を入れて月いくらでと契約します。私の場合はこの家庭が私一人を迎え入れてくれることになったのでパンション・ド・ファミーユ Pension de famille ということになります。その形式にぴったりあてはまる家庭がやっと運よく見つかったというわけです。
それは丁度ボルドーのある中流家庭でした。そこの主人は、ブドウ酒の仲買いをしている。毎日トラックを使ってブドウ酒を産地から小売店に運ばせる。ボルドーは赤ブドウ酒の名産地ですから、産地から小売店に卸す仕事が必要なのです。主人はトラックがくるのを毎日待っている。そうするとやってきて、それをあっちへ行け、こっちへ行けと指図するわけです。そういう家庭だったのです。そこのマダムが、ちょっとインテリといいますか、英語が出来るんです。しかしそれを素振りにも出さない。子供が十五歳の娘と、七歳の男の子。そんなところに約半年間下宿する、フランスの中流家庭の生活のなかにホームステイするということになったのです。
そこで、第一の問題は何かといいますと、勿論毎日のことですから、食べる事。そしてもっと身近なこととして空襲がありました。ボルドーというのは、パリから随分離れているのですが、当時ドイツの国境からどの位離れていたかよくは知りませんが、やはり毎日のように空襲警報が

あるのですね。警報が鳴ると、必らず飛行機がくるかというとそうでもない。しかし時々はくるんです。特に夜間が多い。最初に警報が鳴って、終り頃になって爆撃をくらったということが数回ありました。小さな弾を、パァーンと落とすんです。そうすると、私の住んでいる三階建の家、それは古い家なのでかえって石造の素材が頑丈なんです。弾が直撃すると、上の一階位は崩れますけれども、下は安全だというわけで、初めからそういう弾と建物とのせめぎ合いになっていたのです。パリではよく、防空壕を掘ってコンクリートで固めていました。そこに入れられたことがあるのですが、ボルドーでは、そういう所はなくて、むしろ家の地下室、大抵の家の地下室にブドウ酒を貯蔵しているわけです。そういう所へ避難するわけです。現実に弾が落ちて来たことも数回ございました。

しかし、ドイツ軍――後にはフランスがドイツ軍に降伏してからイギリス軍の空襲があったりしたのですが――私自身は、直撃弾の落下は遂にお目にかからなかったのです。それでも夜、空襲警報を聞いて服を着る。パジャマではいけないんです。フランスの家庭は、それほどやかましくはいいませんけども、それでもズボンをはいてシャツを着て上着迄着て降りて行く。こういうのを何度やらされたか分かりません。これが慣れっこになって、仕舞には、パジャマで降りていった時もありました。そんなふうな程度の空襲に脅かされたことは度々でした。どういう所が爆撃されたかといいますと、ボルドーでは、まあ数十発位が大きな建物目掛けて落とされました。

勿論パリの真中には実弾が落ちたことは後にも先にもありませんが、ボルドーには落とされたんです。落ちてはおりますが、大きな寺院とかモニュメントとかには全然当たらないようにしている。これはドイツ軍のまたはイギリス軍の手心なんでしょう。ヨーロッパ的礼節（西欧だけかもしれませんが）というのでしょうか。歴史にたいする尊敬といいますか、そういうものが最後にはよく守られていたような気がします。

それでとうとう私がボルドーに四月の初めに行きまして、一カ月とちょっとして、ドイツ軍が五月十日頃、西部戦線を突破したのです。オランダ、ベルギーを通らないで、その時はフランスとドイツが直接国境線をもっているアルザス・ローレーヌ地方に迫ると思われていたのです。アルザス・ローレーヌの地方にフランスは非常に堅固な、しっかりしたマジノ要塞というのを作って一生懸命待っておったのです。けれども、ドイツ軍はさすがにそういう所は避けるのです。避けるというか、よく考えて迂回してオランダを突破してベルギーに向うと、ベルギー軍はサァーと逃げるんだそうです。逃げますから、あまりフランスには有難くなかったわけです。ベルギーを無傷で通過して、フランスの国境に入り、その後北部フランスを通過、南へ下ってパリーに接近する。しかし結局パリへは浸入しなかった。パリを後に無血占領するのですが、パリの周囲を迂回したと思います。パリの周囲を通って左右に別かれて、さらに南の方へ攻撃の速度をゆるめながら進撃したわけです。当時フランス政府はパリを脱出してボルドーに移転し、ボルドーに仮

の政府を置いていたということですが、われわれはその事を後で知ったわけです。

そしてついにドイツ軍がボルドーに入る直前に、とうとうフランス軍は、ドイツ軍に降伏するということになったのです。フランスがどう戦って、どういうふうに降伏の意志を伝えたか、ということになりますと、当時のラジオや新聞を通して知ったわけですけれども、一般の市民に告ぐというわけで、政府のレイノー首相の演説がラジオで流されました。「フランス人は、沈黙のうちに決然として、男と生れた最大の義務を果たすべき時がきた」。沈黙のうちに義務を果たす……といいました。こんなふうにラジオ放送が叫ぶわけです。勿論フランス語で叫んでいたのです……

こうしてフランスはドイツ軍に降伏し、六月二十五日に降伏の調印式がボルドーの大寺院のなかで行われたのです。

……………

その後一年足らずの間、フランスに留った私の眼に何が映ったか、私の耳になにが聞えてきたのかは、私の二冊の著書、「わたしのフランス物語」と「続わたしのフランス物語」（いずれも大阪の編集工房ノア刊）によって知っていただきたいと思います。（前者は一年半前、後者は最新の刊行です）いずれの著書も第二次大戦中の戦争と平和の入り乱れた留学記を物語ふうに仕上げたものです。ではこれで私の講演を終ります。

（前関西大学文学部教授）